『人文学報』第120号（2023年２月）
（京都大学人文科学研究所）

1930年代後半の和紙漉場調査と寿岳文章

玉　城　玲　子*

はじめに

小稿は，1930年代後半に本州・四国・九州の紙漉場を実地踏査した寿岳文章の手漉紙業調査について，成果をまとめた『紙漉村旅日記』を中心とする著述と，調査に関連して残された資料をもとに，調査の意義を考えようとするものである。

寿岳文章（1900-92）は，兵庫県明石郡押部谷村高和（現神戸市西区）の真言宗寺院に生まれ，京都中学（のち東寺中学校，現洛南高等学校）を経て，関西学院高等学部や京都帝国大学文学部選科で学んだ英文学者で，英国詩人ウィリアム・ブレイクの研究やダンテ『神曲』の翻訳で知られている。寿岳は，関西学院での同級生である岩橋武夫（のち日本ライトハウス創設者）の妹静子（1901-81）と高等学部卒業直後に結婚し，1926年７月からは南禅寺北門外の僊壷庵に仮寓，ここで関東大震災後の東京から移住してきた柳宗悦と親交を深め，柳との共同編集により雑誌『ブレイクとホキットマン』を，すでに文筆家として小説も発表していた静子も製本作業に参加・協力して刊行する。英語教師として京都府立第一中学校や龍谷大学に出講していたが，1932年４月から母校である関西学院高等学部へも出講するようになり，同じ時期から文章が英文学と並び研究する書誌学の理想を実現するため，夫妻で私家版の書物を作り始める。やがて翌年６月には，京都の南西郊外，向日町の新京阪電車沿線に開発された西向日町住宅地に土地を購入し，居宅向日庵を新築して移り住み，そこで私家版の刊行も本格化させていく。

やがてこの向日庵を拠点として始めたのが，全国各地の手漉紙業調査であった。調査旅行は1937年10月から1940年３月にかけて計15回におよび，その後に地誌類の文献調査も続けられた。向日庵私版の制作と同様に，妻静子も旅行に同行して共に記録をまとめ，その後の調査には長女章子（1923-2005，国語学者）も協力，紙漉村周辺地図の作成には長男潤（1927-2011，天文学者）があたるなど，家族の協力を得て，1943年９月に「京都向日版」として寿岳文章・静

* たまき　れいこ　向日市文化資料館

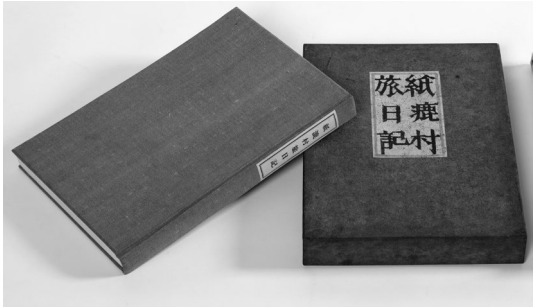

図1　京都向日版『紙漉村旅日記』1943年9月

子の連名で『紙漉村旅日記』（以下，『旅日記』）を刊行する。この稿では，漉場調査にともなって残された関係資料を紹介しつつ，調査の経過をたどり，『旅日記』の前後に公表された研究や著作もあわせて，寿岳文章の紙業調査の特徴と成果をあきらかにし，その意義を考えたいと思う。

1　手漉紙業調査に至る契機

(1) 新村出の導き

英語・英文学の教師として職を得て世に知られていた寿岳は，和紙の漉場調査に出かけその成果を発表するようになった1940年前後には，なぜ和紙研究に携わるのか，と周囲から思われていた側面があったようである。しかし，少年の頃から和漢洋の書物に親しみ，30代早々で英国書誌学会の東洋唯一の正会員となっていた寿岳にとって，書物を構成する重要な要素である紙が早くから重要な関心の対象であったのは，ごく自然なことであった。

ブレイク研究の先達として，また京都移住時代には雑誌を共同編集するなど親交深かった柳宗悦との関係もあり，寿岳は早くから民芸運動に参加するが，その雑誌『工藝』の初めての和紙特集である第28号（1933年4月15日発行）には，「和紙復興」を寄稿している。近代に入って洋紙の技術が輸入されて以降，機械化による大量生産に押されて衰退の一途を辿っていた日本伝統の手漉紙の価値と，その復興を強く訴えている。同じ頃，米国で手漉紙による書物の私版を手がけるかたわら世界の手漉紙を研究するダード・ハンターが，調査のため来日して京都を訪れた時に出会い，1日をともにして紙について親しく言葉を交わしている。また，埼玉県小川町の紙漉場を特集した『工藝』第59号（1935年11月30日発行）には，英文による *Hand-made Paper in Japan* を発表し，和紙文化の国際化への貢献という，寿岳ならではの仕事ぶりを示している。

その寿岳に，和紙の漉場を訪れて調査する機会を与えたのは，新村出（1876-1967）であった。言語学者として京都帝国大学教授であった新村は，選科に入り英文学を専攻した寿岳の直接の師にはあたらないが，もともと和漢の古典にも高い関心を持つ寿岳は，大学図書館長を長く務めた新村に接して教えを受けていた。選科修了の1927年3月以降も，烏丸鞍馬口西入の小山にある新村邸を訪れたり，研究や就職について相談するなど，深く親密な師弟としての関係を結んでいた。日本の古典文学研究や近世地誌類の博捜，海外の文献の紹介など，幅広く情報を

交換している。新村もしばしば寿岳の居宅向日庵を訪ね，家族ぐるみの親交を深めるようすが寿岳の日記に記されている[1)]。

1936年4月18日付の寿岳文章日記に，「新村先生をとひ，昼飯を共にし，夕方までゐる。学術振興会から年額千円乃至千三百円を得，三年がかりで日本の紙漉をしらべてみないかとの話なり。夢かと思ふ。熟考を約してかへる」とある。新村は1928年から帝国学士院の会員であり，奨学資金の授与者に寿岳を推薦しようとの申し出であった。後に寿岳がまとめた『旅日記』の「まへがき」によれば，和紙の文化史的研究は新村自身の念願であるが，老いて山間僻地の旅行は意に任せず寿岳に代わってやるように，とのことだったという。寿岳は2日後の20日の日記に，新村へ承諾の手紙を出したことを記している。

(2) 調査の計画と有栖川宮記念学術奨励金の下賜

寿岳はほどなく，帝国学士院が推戴する有栖川宮記念学術奨励金を得るための調査計画作成に取り組み，3カ月後の7月12日付の新村宛の手紙で，日本各地の漉場の所在地を知る目安もつき，この夏にはかなり詳細な予定書も出来上がることを知らせている[2)]。

同じ1936年の10月24日には，新村をはじめとする京都の和紙に関心を寄せる人々が京大楽友会館に集まり「紙に関する座談会」を開き，これを契機として和紙研究会が結成されることになった。翌年2月に雑誌『和紙談叢』1を刊行，寿岳は「ハンタア氏『極東紙漉国巡礼』を読む」と題する一文を寄せ，刊行されたばかりのダード・ハンターによる日本・韓国・中国の製紙行脚の著作を紹介している。

そして1937年3月末にはあらためて紙漉地の調査旅程を作り，4月には新村からの求めに応じて，地誌的調査趣意，調査方法，調査者の履歴等をまとめ，副本を添えて送り，受け取った新村はすぐに学士院へ提出したようである[3)]。この時提出された書類の写しとみられる資料が新村の手元に残されており，計画の内容がわかる[4)]。趣旨と調査方法の一部を次に引用する。

一，本州・四国・九州ニ現存スル手漉紙業ノ地誌的調査ヲ行ハントスル趣意

〔中略〕本州・四国・九州ニ現存セル手漉紙業地ヲ歴訪踏査シ，昭和聖代ニ於ケル和紙抄造ノ現況ヲ写真及ビ文字ニヨリテ記録シ，ソノ歴史的背景ヲ尋ネ，本邦手漉業ノ地誌的調査ヲ能フ限リ綿密精確ニ行ヒ，以テソノ歴史的研究ヲ補足スルト共ニ，我国ノ特技トモ称スベキ手漉紙業将来ノ発展ニ資セシメントスル所以ナリ。昭和十二年四月

二，調査方法（費用ノ概算ハ別項トシテ提出）

調査単位ヲ（一）近畿地方，（二）中部地方北部，（三）中部地方南部，（四）関東地方，（五）奥羽地方及新潟県，（六）中国地方，（七）四国地方，（八）九州地方ニ分チ，三年間ニ亘ツテ調査ス。第一年ニハ文献に拠る歴史的調査ト，近畿地方・関東地方ノ調査ヲ行ヒ

（コノ調査費総額一〇〇九円五〇），第二年ニハ，中国地方・奥羽地方及新潟県・中国地方ノ調査ヲ行ヒ（コノ調査費総額一三二〇円五〇），第三年ニハ中部地方北部・中部地方南部・九州地方ノ調査ヲ行フ（コノ調査費総額一一二六円五〇）。調査費・調査地・調査者・調査日数ノ詳細ハ別項ニテ提出セリ。

費用の概算書（明細）が別にあり，それによれば文献に拠る歴史的調査費に300円を計上する。実地踏査に拠る調査費は3年間をあわせて3,156円50銭で，合計3,456円50銭となる。実地踏査の内訳として，8つに分けた調査単位ごとに調査先の町村名が列記されており，この町村名は1938年6月農林省農務局発行「副業参考資料」に紙漉を副業とする村として名のある村名を列挙したものであった。各地方別の調査日数は，近畿17日，中部北部10日，中部南部12日，関東12日，奥羽及新潟県16日，四国10日，九州17日と予定される。調査者は助手共2名とあり，助手の手当を1日2円とする。趣旨に写真及び文字にて記録とあるように，経費には写真撮影費が1日当り2円50銭で算入される。写真はこの調査のために寿岳がカメラを入手し，自ら撮影する計画である。旅費は宿泊費を含めて計算され，汽車はすべて三等料金と注記がある。また他に雑費として1日当り1円が計上される。各地方の調査日数に，助手手当・写真撮影費・雑費を足した1日当り5円50銭を乗じ，これに旅費を加えて，各地方ごとの調査費としている。

ちょうど1年前に新村から持ちかけられた話とほぼ同じ期間・予算規模の計画になっており，この申請はほどなく認められたようで，寿岳日記の1937年7月5日条には，寿岳が上京して学士院関係者とともに有栖川宮家を継承する高輪の高松宮邸へ赴き，挨拶をする様子が詳細に記録されている。和紙に関するハンターやクラパトンなど外国人の著作や「紙漉重宝記」などの和書を持参して，これから取り組もうとする調査の説明をした寿岳に対し，両宮から「外国人でさへ不完全乍らかゝる述作あり，日本人たるもの大いに研究すべき也」という言葉があったことを記す。

こうして得た資金によって，この3カ月後の1937年10月から3カ年，実際には1940年3月までの2年半の間に，15回に及ぶ紙漉村行脚の旅が敢行されることになった。

2　手漉紙業調査の実施状況

(1) 調査先への依頼と旅程の作成

紙業調査がどのような準備のもとに進められたのかを示す関係資料が，調査で収集した和紙類や紙関係の書籍とあわせて，寿岳文章没後の1997年に長女章子氏によって兵庫県多可郡加美町（現多可町）に寄贈されている[5)]。そのなかに，調査の開始に先立ち，寿岳が計画書に挙げ

ていた調査先，すなわち1938年6月の「副業参考資料」に名のある村々へ出したとみられる書式が残されている。その文面は次のとおりである。

拝啓　愈々御清穆の段奉賀候，陳者小生此度帝国学士院の御推薦を得て高松宮家より有栖川宮記念奨学金御下賜の恩命に接し，本邦手漉紙業の歴史地理的研究に従事致す事と相成候，就ては来る（ママ）頃御地の手漉紙業を調査致したく存じ候が，万一目下休業中等の事無之候や，御多用中甚だ恐縮に存じ候へ共，右御返事賜らば幸甚に存じ候，尚調査に必要なる御地紙漉業沿革の資料文献等有之候節は，予め御取揃願おき閲覧の便を御与へ下さらば幸甚に存じ候。また参上の節は各種製紙見本も御頒ち願ひたく，その他何かと御厄介に相成る事と存じ候まゝ，何分ともよろしく御願申上候，敬具

月　　日　　京都府乙訓郡向日町　（関西学院教授／龍谷大学講師）

巻紙状の横長の紙に毛筆の文字が印刷されており，「寿岳文章」の名を自署し，奥には宛先を書けるようにあらかじめ余白が設けられており，調査先に応じて時期を書く部分にも空白を設ける。まずこの文書で連絡をとり，調査が可能となった村々とはその後直接やり取りをしつつ，各府県とも連絡をとり具体的な旅程を詰めていったようである。次に掲げるのは，府県宛てに出した視察日程案で，調査3年目の1940年1月16日に訪れた佐賀県の例である。

佐賀県下手漉紙業視察日程案

視察者　関西学院大学教授[6]・龍谷大学講師　寿岳（ジュガク）文章　京都乙訓郡向日町

一月　六日（土）　京都発。

一月十四日（日）　午後一時頃福岡県羽犬塚ヨリバスニテ入県，佐賀郡松梅村名尾調査，佐賀市ニ宿泊。〔「中止」と追記あり，筆者注〕

一月十五日（月）　（長崎県ニ入リ，北高来郡調査）

一月十六日（火）　朝雲仙ヲ発シ，再ビ入県，西松浦郡南波・波多及ビ黒川村調査，唐津ニ宿泊，十七日（水）福岡県ニ入ル。

備　考

△視察者ハ昭和十二年度ヨリ毎年引続キ高松宮家ヨリ有栖川宮記念学術奨励金ヲ拝受シ，本邦手漉紙業ノ歴史地理的研究ニ従ヒツツアリ。此度ノ旅行モソノ研究ノ為ユエ，研究資料ノ閲覧，製紙実物見本ノ蒐集等ニ便宜ヲ賜ハラバ幸甚。△助手トシテ妻同伴ノ予定，晴雨ニ不拘日程履行。△前記ノ概案ニヨリ適当ナル時間表ヲ御作成願ヒタク，尚視察紙漉部落ノ所在地ト交通ノ便等詳細ニ御知ラセ下サラバ幸甚。△県下現在ノ和紙生産統計，最近ノ「県勢一覧」等賜ハラバ幸甚。△宿泊地ニ於ケル質実清潔ナル旅館御教示願ヒタシ。

高松宮家から有栖川宮記念の学術奨励金を得て実施している調査旅行であることを述べ，研究資料の閲覧や実物見本の蒐集に便宜を図ってほしいことを依頼している。計画段階から手当を予算化していた助手は妻静子であり，天候に拘わらず計画通り遂行するとある。旅程の作成を依頼し，交通の便を詳しく教えてほしいとも頼んでいる。また，和紙に関する統計資料や県勢に関する行政資料等の提供を依頼する。最後に宿泊予定地の「質実清潔」な旅館の紹介を求めているところは，のちに刊行する『旅日記』中に必ず添えられる宿泊先の部屋や食事についての，やや手厳しい描写と考え合わせると興味深い。

実際の九州方面の旅では，1940 年 1 月 6 日に京都を発し，大分，宮崎，鹿児島，熊本をまわり 14 日に福岡，15 日に長崎を経て，16 日に佐賀に入り神埼郡仁比山村三谷を訪れている。調査日程がほぼ固まった段階で各県に依頼したことがわかるが，佐賀県内での調査先は日程案にある予定から変更されている。調査先の県や現地とのやり取りのなかで，実現可能なより好ましい計画に短期間でまとめ，現地に赴いたようである。この時佐賀で実際に訪れた仁比山村の三谷集落は，『旅日記』のなかで寿岳が「紙も景色も此処が恐らく九州随一ではあるまいか」と述べ，またここで漉かれる傘紙を西日本を代表する紙として，『旅日記』の本文用紙に採用することになる調査地である。

訪れる紙漉村の多くは，交通不便な山間僻地に位置する。寿岳が残した紙業調査関係資料のなかには，一般向けに作成された各府県・都市の地図や観光パンフレット，交通時刻表などが含まれている。事前の準備は現地と連絡をとり，資料を取り寄せて，周到に練られたことがうかがわれる。

しかし，準備になるべく万全を期しても，いざ実際に現地を訪れると，思い通りに調査が進まないこともあった。もともと教師としての仕事を持っていた寿岳は，日帰りや 1 泊 2 日で訪問可能な近畿地方以外は，学校の長期休暇の間にしか調査に出向くことができず，農閑期の副業として冬期の限られた時期に紙漉きをする村が多い調査先で，実際の仕事ぶりを見るには難しい事情があった。また，初めて出かけた 1937 年秋の和歌山・奈良方面の調査では，交通機関の連絡に行き違いがあるのは仕方がないにしても，現地の役場に出した事前の問い合わせや依頼に対する返事がはっきりしないままで出かけると，期待する対応がしてもらえず，充分な調査にならないこともあった。

⑵ 水谷良一の協力

3 回目の旅行にあたる翌 1938 年 2 月の関東方面への調査は，長男の病気のため静子は家に残り寿岳一人の旅となったが，最初の調査地に近い茨城県水戸に投宿するとすぐに，県統計課の役人が宿を訪ねてきて，翌日からの調査の打合せをしている。これは，1，2 回目の調査で支障が出たため，「紙漉地の役場へ〔寿岳から，筆者注〕依頼の手紙を出すほか，統計局の水谷

良一兄が，夫々の地方庁統計課へ，依頼の私信を送られる事になつた為」（『旅日記』20頁）であった。寿岳は，当時内閣統計局の労働課長であり民芸の有力な同人である水谷良一に協力を仰いだのであった。

水谷良一（1901-59）は，愛知県西春日井郡西枇杷島町の素封家の長男として生まれ，1924年に東京帝国大学法学部を卒業し内閣統計局に任官した。1931年4月から同局労働課長，1938年5月には商工省に転じ，特許局や貿易局など1944年3月に退官するまで内閣統計局，商工省，軍需省などの高官を歴任し，退官後も官庁の外郭団体や審議会で公職に就いた。学生時代に白樺派に共感して柳宗悦を知り，その影響で民芸運動に参加，内閣統計局時代には雑誌『工藝』の編集や執筆で活躍し，役所任官後も実家から援助があったという豊かな資力と，自ら備える学識とによって，芹沢銈介や棟方志功を援助し育成した人物であった[7]。

寿岳は，一つ年下の水谷と民芸の活動を通じて親交があり，紙業調査については直接的に大きな援助を得た。『旅日記』の「まへがき」には，新村に次いで水谷の名を掲げ，次のように謝意を示す。

> 畏友水谷良一氏は，私どもの紙漉村行脚が始まつた頃，内閣統計局労働課長であつたが，各府県庁の統計課と連絡を取り，私どもの旅行が，限られた日程内によく所期の目的を達し得らるるやう，終始渝らない厚誼を披瀝された。手漉紙業地の実地踏査には，昭和三年六月農林省農務局発行の「副業参考資料」のうちの，手漉製紙に関する調査が基礎となることを教示し，わざわざその文献を農林省から借り出してくれられたのも同氏である。

そもそも調査計画作成の当初に，国内各地の漉場所在地の情報源となった「副業参考資料」を寿岳に教えたのも水谷だった。

寿岳の手許には，調査旅行先の県庁へ，水谷が便宜を図るよう指示したことを報せる書簡が何通も残されている。一例として，8回目の調査となる中国地方へ1938年10月15日から出かける少し前である10月3日付の水谷からの来信を掲げる。

> 御手紙拝見，鳥取・山口・広島へは此の手紙と一緒に依頼状（予定表同封）差出しました。商工課長とも思いましたが，六大府県外の商工課長には商工省は縁がうすいので，やはり昔なじみの統計家（ママ）に頼みました。皆手塩にかけて育て上げた人々です。
> 内，山口の西村氏はあまり深くなく，且多少の酒癖あり，これは通り一辺の案内にして下さい。広島の皆川君は温厚の深切者，嘗てリーチ，柳，河，浜の連中も厄介をかけました。大いに積極的に世話を受けて下さい。鳥取の堀口四郎次，これは小生と密接の関係あり，昔から一しょに仕事をしてきた仲です。大いに世話をさせ，凡ゆる厄介をかけて何等差し

支へありません。〔中略〕先は御答へまで[8]。

水谷は，この半年前に商工省へ転じていたが，馴染み深い内閣統計局時代に培った人脈で，寿岳が訪問する先の県庁統計課の役人に予定表を同封した依頼状を送り，世話を頼んだことを報せている。予定表とは，前項でふれた寿岳作成の視察日程案に近いものと推測される。各人の人柄をまで寿岳に伝える親切さである。

帝国学士院の推薦により高松宮家から有栖川宮記念学術奨励資金を得ての調査は，1930 年代後半という時代において，調査協力を促す絶対的な要素であったと想像されるが，中央政府の高官である水谷から地方官庁の役人への直接の援助要請もまた，調査を実務的に円滑に進めるうえできわめて効果的であった。3 回目の関東方面への旅行以降，各調査地へ入るごとに，その県庁の統計課の役人かそれに近い人物が駅に出迎えたり，宿泊先を訪ねてきて今後の日程を打ち合わせ，時には車を出し，また案内人が調査に同行するなど，さまざまに便宜を図る姿が『旅日記』に記録されている。水谷は，寿岳の紙業調査全般にわたって，惜しみなく協力し，大きな役割を果たしたのであった。

(3) 調査地と調査事項

『旅日記』の記述で知られる寿岳夫妻の調査旅行の日程と調査先は，表 1 のようである。2 年半の間に，兵庫・三重・滋賀への日帰りから，九州を一周する 12 日間に及ぶ長旅まで 15 回にわたる旅行で，96 カ町村を訪れている。『旅日記』の巻末に附した，紙業調査の前後に別途行った調査地である埼玉県小川町，京都市吉祥院，兵庫県杉原谷の 3 カ所を加えると，全 99 カ町村となる。

寿岳が調査対象地の参考にした「副業参考資料」（1928 年 6 月）には，手漉製紙に携わる地方として，北海道・青森・千葉を除く 44 府県の約 550 の市町村名が挙がっている。郡内の多くの村名を連ねまとめて報告されているところもあって，実態より村数が多い可能性もある。また寿岳が調査するまでの 9 年間に，副業として奨励されながらも衰退期にあった手漉製紙を廃業したところも少なくない時代であったことから，調査時点では 550 より相当数減っていることが推測される。そのなかで，寿岳が実地に足を運んだ 99 カ町村は，当時の日本全国の動向をみるに充分な数と考えることができるのではないか。府県でいえば訪問した数は 40 にのぼり，「副業参考資料」に挙がるなかで実際に訪れていないのは，東京・大阪の二大都市部と埼玉，四国旅行の際に通過しただけとなった香川の 4 府県である。このうち埼玉については，自身の紙業調査前の 1934 年に，民芸同人とともに小川町の製紙場を訪れた時のことを『旅日記』に附として載せている。

調査事項については，原料調達・製法・作業時期・粘着剤（ネリ）の種類・材料や道具の呼

表 1　紙漉村への調査旅行

『紙漉村旅日記』（1943 年 9 月、京都向日版）より作成
※Ⅰ～XVの調査次数は，調査に出かけたまとまりごとに便宜的に伏した。

調査	訪問年月日	府 県	（旧国名）	郡	町 村	地 名	現市町村
	昭和 12 年（1937）						
Ⅰ	1937.10.11	和歌山県	（紀伊国）	東牟婁郡	敷屋村	小津荷（こつが）	田辺市本宮町
	1937.10.13	和歌山県	（紀伊国）	有田郡	八幡村	清水	有田川町
Ⅱ	1937.11.13	奈良県	（大和国）	吉野郡	国樔（くず）村	窪垣内	吉野町
					丹生村	黒木	下市町
	1937.11.14	和歌山県	（紀伊国）	伊都郡	九度山町	下古沢	九度山町
					河根（かね）村	河根	九度山町
	昭和 13 年（1938）						
Ⅲ	1938. 2. 7	茨城県	（常陸国）	久慈郡	諸富野（もろとの）村	西野内，諸沢	常陸大宮市
	1938. 2. 8	茨城県	（常陸国）	那珂郡	隆郷（りゅうごう）村	鷲子（とりのこ）	常陸大宮市
	1938. 2. 8	栃木県	（下野国）	那須郡	烏山町		那須烏山市
					向田村		那須烏山市
	1938. 2. 9	栃木県	（下野国）	安蘇郡	飛駒（ひこま）村		佐野市
	1938. 2.10	群馬県	（上野国）	北甘楽郡	小幡町	善慶寺	甘楽郡甘楽町
					秋畑村		甘楽郡甘楽町
	1938. 2.12	神奈川県	（相模国）	愛甲郡	高峰村	角田，海底（うぞこ）	愛川町
Ⅳ	1938. 3.14	三重県	（伊賀国）	名賀郡	滝川村		名張市
	1938. 3.15	三重県	（伊勢国）	度会郡	城田（きだ）村	中須	伊勢市
				飯南郡	柿野町	深野	松阪市
Ⅴ	1938. 3.22	京都府	（丹後国）	加佐郡	河守上（こうもりかみ）村	二俣	福知山市
	1938. 3.22	京都府	（丹波国）	何鹿郡	東八田村	黒谷	綾部市
	1938. 3.23	京都府	（丹後国）	与謝郡	世屋村	畑	宮津市
Ⅵ	1938. 4.18	福島県	（磐城国）	石城郡	入遠野村	入遠野	いわき市
					上遠野村	深山田（みやまだ）	いわき市
	1938. 4.19	福島県	（磐城国）	相馬郡	石神村	信田沢（しだざわ），深野	南相馬市
	1938. 4.19	宮城県	（磐城国）	伊具郡	丸森町		丸森町
	1938. 4.20	宮城県	（陸前国）	名取郡	中田村	柳生	仙台市太白区
	1938. 4.21	岩手県	（陸中国）	東磐井郡	長坂村		一関市
						北山谷（きたやまや）	一関市
	1938. 4.22	岩手県	（陸中国）	和賀郡	十二鏑村	北成島	花巻市
					中内村	南成島	花巻市
	1938. 4.24	秋田県	（羽後国）	平鹿郡	睦合村	宿	横手市
					植田村		横手市
	1938. 4.25	山形県	（羽前国）	最上郡	舟形村	長沢	舟形町
	1938. 4.26	山形県	（羽前国）	東村山郡	鈴川村	双月（そうづき）	山形市
				南村山郡	西郷村	高松	上山市
	1938. 4.27	福島県	（岩代国）	伊達郡	山舟生村		伊達市
				安達郡	上川崎村		二本松市
	1938. 4.28	福島県	（岩代国）	耶麻郡	熱塩村	日中（にっちゅう），新村（しんそん）	喜多方市
	1938. 4.28	新潟県	（越後国）	東蒲原郡	豊実村	新渡（にいわたり）	阿賀町
	1938. 4.29	新潟県	（越後国）	北魚沼郡	湯之谷村	大沢	魚沼市
Ⅶ	1938.10. 6	兵庫県	（摂津国）	有馬郡	塩瀬村	名塩	西宮市
Ⅷ	1938.10.15	岡山県	（美作国）	津山市			津山市
	1938.10.16	鳥取県	（因幡国）	八頭郡	智頭町	篠坂	智頭町
					佐治村		鳥取市
	1938.10.17	鳥取県	（因幡国）	気高郡	日置村	河原，山根	鳥取市
					青谷町		鳥取市
	1938.10.18	島根県	（出雲国）	八束郡	岩坂村		松江市
	1938.10.19	島根県	（石見国）	鹿足郡	小川村	耕田（こうだ）	津和野町

調査	訪問年月日	府 県	(旧国名)	郡	町 村	地 名	現市町村
	1938.10.20	山口県	(周防国)	玖珂郡	河山村	夏宿(なつやどり)，柳瀬	岩国市
	1938.10.21	広島県	(安芸国)	高田郡	有保村	保垣(ほがき)，有留(ありどめ)	安芸高田市
	1938.10.21-22	広島県	(備後国)	比婆郡	庄原町	柳原(やなばら)	庄原市
	1938.10.22	岡山県	(備中国)	阿哲郡	新見町	高尾	新見市
	1938.10.22-23	岡山県	(備中国)	上房郡	高梁町	広瀬	高梁市
Ⅸ	1938.12.11	三重県	(伊勢国)	河芸郡	白子町		鈴鹿市
	昭和 14 年 (1939)						
Ⅹ	1939. 3.22	徳島県	(阿波国)	名西郡	神領村	小野	神山町
	1939. 3.23	徳島県	(阿波国)	麻植郡	川田町		吉野川市
				美馬郡	半田町	下竹	つるぎ町
	1939. 3.25	高知県	(土佐国)	吾川郡	伊野町		いの町
					神谷村	成山(なりやま)	いの町
	1939. 3.26	高知県	(土佐国)	幡多郡	昭和村	細々(さいさい)	四万十町
	1939. 3.26	愛媛県	(伊予国)	東宇和郡	明治村	延野々(のべのの)	北宇和郡松野町
					泉村	岩谷	北宇和郡鬼北町
	1939. 3.27	愛媛県	(伊予国)	喜多郡	天神村	平岡	内子町
	1939. 3.28	愛媛県	(伊予国)	周桑郡	国安村		西条市
				宇摩郡	寒川村		四国中央市
Ⅺ	1939. 4.16	滋賀県	(近江国)	栗太郡	上田上村(かみたなかみ)	桐生	大津市
Ⅻ	1939. 5.12	長野県	(信濃国)	東筑摩郡	麻績(おみ)村		麻績村
	1939. 5.13	長野県	(信濃国)	上水内郡	芋井村	桜	長野市
	1939. 5.14	長野県	(信濃国)	下高井郡	豊郷(とよさと)村	坪山	野沢温泉村
	1939. 5.16	山梨県	(甲斐国)	西八代郡	市川大門町		市川三郷町
				南巨摩郡	西島村		身延町
ⅩⅢ	1939.12.23-24	福井県	(越前国)	今立郡	岡本村	大滝	越前市
	1939.12.25	石川県	(加賀国)	江沼郡	河南村	長谷田	加賀市
	1939.12.27	富山県	(越中国)	婦負郡	八尾町		富山市
					野積村		富山市
	昭和 15 年 (1940)						
ⅩⅣ	1940. 1. 7	大分県	(豊前国)	中津市	金手		中津市
	1940. 1. 8	大分県	(豊後国)	南海部郡	上野(かみの)村	上小倉	佐伯市
	1940. 1. 9	宮崎県	(日向国)	児湯郡	上穂北村	坂江	西都市
	1940. 1.10	宮崎県	(日向国)	東諸県郡	本庄町	大脇	国富町
				都城市	下長飯(しもながへ)		都城市
	1940. 1.11	鹿児島県	(大隅国)	姶良郡	加治木町		姶良市
					蒲生(かもう)町	上久徳(かみひさとく)	姶良市
	1940. 1.12	鹿児島県	(薩摩国)	日置郡	伊作町	中津	日置市
	1940. 1.13	熊本県	(肥後国)	八代郡	宮地村		八代市
	1940. 1.14	福岡県	(筑後国)	八女郡	古川村	溝口	筑後市
	1940. 1.15	長崎県	(肥前国)	北高来郡	湯江村	溝口	諫早市
	1940. 1.16	佐賀県	(肥前国)	神埼郡	仁比山村	三谷	神埼市
	1940. 1.17	福岡県	(筑前国)	糸島郡	福吉村	吉井	糸島市
	1940. 1.18	山口県	(周防国)	佐波郡	島地村		山口市
ⅩⅤ	1940. 3.25	岐阜県	(美濃国)	山県郡	富波村	青波	山県市
	1940. 3.26	岐阜県	(美濃国)	武儀郡	上牧村		美濃市
	1940. 3.27	岐阜県	(美濃国)	恵那郡	三濃村	野原	愛知県豊田市
	1940. 3.27	愛知県	(三河国)	東加茂郡	旭村	東萩平	豊田市
	1940. 3.28	静岡県	(駿河国)	志太郡	朝比奈村	小園	藤枝市
	1940. 3.29	静岡県	(遠江国)	周智郡	天方村	栗島	森町
				磐田郡	下阿多古村	上野	浜松市
	1940. 3.30				上阿多古村	長沢	浜松市
附 1	1935.10.20	埼玉県	(武蔵国)	比企郡	小川町		小川町
附 2	1940. 2.13	京都府	(山城国)	京都市下京区	吉祥院	西ノ庄	京都市南区
附 3	1940. 8. 2-3	兵庫県	(播磨国)	多可郡	杉原谷村		多可町

び名（地方名）など生産の状況，従事者の男女別・従事戸数・生産量・年産額・販売経路・組合組織など統計的な概況，紙漉創始の由来・顕彰碑・句碑・宗旨・祭礼・紙漉き歌の有無など歴史・民俗的事項におよぶ。これらの記述は，実地調査の際の聞き書きや収集記録に加えて，事前・事後に収集した統計類や地誌類の記録と合わせてまとめられている。

図2　漉場調査旅行中の寿岳文章・静子

『旅日記』の「まへがき」によれば「旅に出ると，必ず日記をつけることにし，原則として，沿路の叙景や紙漉村の描写は妻が，紙漉に関する専門的な記述は私が，それぞれ担当した」とあり，紙業調査に直接かかわる記述は寿岳が担当している。『旅日記』そのものは，日記という書名のとおり日ごとの紀行文のかたちをとり，調査地へ赴く途中の交通・風景や村のようすが文学的に叙述されるが，漉場に到着すると上記の調査事項を，順序立てて淡々と緻密に漏れなく記す部分が続く。民俗学における生業調査の項目や形式は，この頃すでに形づくられていたと思われるが，どの地方の漉場においても，あらかじめ整理された一定の項目に従って調査を進めたことが記述に表れている。

ちなみに，表1の15回の調査旅行で，寿岳が静子の同行なしで赴いたのは，Ⅲ 1938年2月の関東地方，Ⅶ同年10月の兵庫県有馬郡塩瀬村名塩への日帰り調査，Ⅸ同年12月に職場の同僚と連れ立ち伊勢型紙を調査した伊勢・白子町，XIII 1939年12月の北陸地方，XV 1940年3月の東海地方の5回である。この5回分の『旅日記』の叙景は，他とは趣きがやや異なり，文学的修辞が比較的少なく感じられる。全体を文章が執筆したことによるのであろう。

『旅日記』にまとめられた紙業調査報告の部分は，当時における手漉紙の全国的動向を把握しうる充分な数の漉場を，限られた期間のうちに実際に訪れ，一定の調査項目に従って記述されたものとみることができる。

(4) 実物見本紙の収集と写真撮影

紙業調査旅行では，出来うる限り，実物見本紙の収集にも努めている。調査の依頼状にも府県宛の日程表にも，「参上の節は各種製紙見本も御頒ち願ひ」たい旨が明記されており，当初からの計画であった。

最初の調査先である和歌山県東牟婁郡敷屋村では，帰り際に「柿一籠と紙を随分沢山土産に貰ひ」（『旅日記』8頁）とあるように，現地で用意されているものを持ち帰る場合もあったが，

宿泊先に旅装を解き食事をすませた就寝前のわずかな時間にも，その日のうちに日記をまとめる静子を宿に残して，土地ならではの地紙を扱う店を探して文章が町なかへ出かけるようすや，汽車乗り継ぎの合間を捉えて駅前で紙屋を探す記述がしばしばみうけられる。

紙屋での収集の一例をあげれば，1939 年 12 月の北陸地方への調査旅行では，石川県江沼郡河南村の数年前までは長谷田紙を漉いていた地を訪ね，江戸時代に藩の御用紙を抄造した頃からの話しを聞いた後，大聖寺駅前で紙屋を探し，3 軒目に入った店で 5 年ほど前に漉かれた長谷田半紙や河北郡浅川村田ノ島で作る板奉書を見つけ喜んでいる。またそこで金沢裁判所前の紙屋では他にも加賀の地紙があると聞いて，駅へ急ぎ金沢へ向かい，金沢在辰巳産の味のよい加工紙を入手している（『旅日記』189–192 頁）。紙の抄造は絶えていても，旅程のなかでできるだけ地紙を扱う店を探し，かつての紙漉きの話を採録したり，商品として残る紙を収集している。

特別な例としては，1938 年 10 月の山陰・中国方面の旅で，最後に訪れた柳井家で備中檀紙を得たことが挙げられる。柳井家の当主の弟が寿岳の学校の同僚だった縁によって，家に伝わる記録・文献を調査する便宜をはらわれ，先祖代々が漉いてきた元亀天正以降の檀紙の実物を見せてもらうなど，手厚い対応を受けている。そして「今度のお調は　宮様の思召であり，家の名誉にもなる又とない機会」であり，研究に役立ち，先祖の名が出れば紙漉きを廃業している自身の先祖への御恩報じである，としてこれまで誰にもあげなかったという大高檀紙の，わずかしか残っていない美しい 1 枚と，洪水に浸かり周囲がやや汚れたものを贈られている。寿岳は，久しく立ち続けた帰途の満員の急行列車の中で，檀紙を頭の上に捧げるようにして大切に持ち帰っている（『旅日記』134–135 頁）。

こうして集めた全国の手漉紙の実物見本は，そのうち 134 種を選び，1 頁大に近い大きさかその縦半分ほどを直接挟み込む例もあるが，多くは 1 辺 6cm四方程度かそれより小さい紙片に切り分けて『旅日記』本文内に貼附されている。特に文化財的価値が高いと思われる備中檀紙も，実物見本の一つとして切り貼りされている。記述される抄造和紙の実相を，同じ 1 冊の本のうちに実物によって確かめることができる。

『旅日記』に貼附された以外の見本紙については，素紙のままの状態で自邸・向日庵内に永く保管され，先に述べたように関係資料とともに兵庫県多可町へ寄贈されている[9]。

紙の実物見本とあわせて調査の記録的価値を高めたのが写真である。経費見積もりの中に写真撮影費を算入しており，調査先では寿岳自らカメラマンとなって撮影する計画であった。調査初日の和歌山・熊野本宮行きのバスの途中，道中もっとも高所とされる地点で停めてもらい，あちこちの山を写真に撮り，「巧くとれたであらうか。これが文章の写真術第一課である。」と書いている（『旅日記』2–3 頁）。『旅日記』には 199 枚もの写真が，奥州白石産の紙にコロタイプ印刷され，紙見本と同様に切り貼りして挿図として収められている。「まへがき」には，旅

行中に撮影したこれらおびただしい写真が，収集した紙見本とともに，年を経るにしたがい劣化し紙魚の餌食となることをおそれたのが，『旅日記』を向日庵本の一として出版する動機として述べられている。

写真撮影は，紙漉きの仕事場，作業風景や用具などだけではなく，民芸同人らしい観察眼による記述にあわせて調査地周辺の景観や興味を寄せた家屋や生活のようすに及ぶ。さらに調査先の人びととの記念撮影などもあり，紙業調査関係資料のなかの書簡などによれば，後に撮影した写真を送付して紙漉村との関係をつなぐことにも使われている。

1937年11月に2度目の調査旅行で訪れた奈良県吉野郡丹生村は，国樔よりも古い紙郷と見込んで調査に赴くも，役場に来意が伝わらず農繁期で紙漉きも始まっておらず，老収入役から聴取するのみで引き上げたところである。しかし紙業調査資料のなかには，丹生村黒木で母が紙を漉くという尋常小学校5年の児童からの手紙とその妹の写真が含まれており，文面によれば寿岳は調査時に出会った児童の写真を撮影し，後に焼き付けを送ったようである。児童からの手紙には，御礼とともに母が漉いたという紙を同封したことが記されている。現在，紙は同封されておらず，どのような紙だったかはわからないが，時間に追われる調査行のなかでも，個人が日常生活を撮影するのはめずらしかったと思われる当時，写真を媒介に現地の人びとと交流を深めるようすがうかがえる。

(5) 紙業関係資料の収集と地誌調査

寿岳は，実地調査の依頼文で，各紙業地の沿革や統計など資料文献の閲覧や提供を頼んでいるが，これに応じて訪問先で用意された資料を入手し，また閲覧・書写して持ち帰っている。現地訪問の前後に，謄写物や印刷物，紙見本や抄紙会社のパンフレット類を取り寄せ，時にはわざわざ筆写して送ってもらう場合もある。高知の調査では，高松宮家別当を務める旧藩主山内家の親族からの連絡により，特に手厚い応対をうけたが，県庁差し回しの自動車で赴いた県立図書館で，江戸時代の抄紙関係文献を多数閲覧し，写真や書写が間に合わない資料について，館専属の筆耕者に頼んで後から送ってもらっており，罫紙を分厚く綴った書写本が今日に伝わっている。

現地とやり取りした書簡類や，沿革・統計などの資料は，地方別に旧国名をインデックスタブに書いた紙ファイルに入れて整理されている。現在，兵庫県多可町の和紙博物館・寿岳文庫に保管されているファイルは，北海道以外の全国に及び，66カ国分62ファイル，他に「総記」，「奥羽総記」，「九州総記」，「支那及朝鮮」を加えて66ファイルにのぼる。

ファイルのなかに必ず収められるのは，各地の地誌類からの紙に関する抜き書き記録で，A5版大の2穴または6穴のルーズリーフに筆写し，旧国名の表題のもとにまとめて紙縒りで綴じられている。このルーズリーフのなかには，寿岳の英文学研究の大著である『キルヤム・ブ

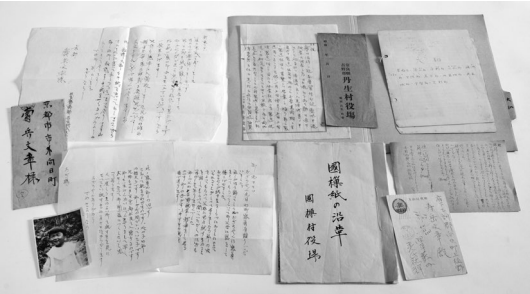

図３　紙業関係資料 「大和」ファイル

レイク書誌』（1929 年 4 月刊行）の原稿とみられるブレイク作品の書誌情報をタイプした裏紙を再利用するものが多く含まれている[10]。

紙に関する文献資料については，かねてより寿岳は新村出から教示を得，寿岳からも情報を提供するやり取りがあるが，今回の紙業調査に際して，実地調査を開始して約 1 年後の 1938 年 9 月に，寿岳は新村に対し，京都帝国大学の各研究室での文献調査について便宜を図ってもらうことを依頼している。

〔前略〕今秋より，かねて先生よりもお話しの京大国史研究室・農政経済研究室・経済史研究室へ和紙関係の記事を求めて文献調査に参りたく，就いては先生の御手数相煩し恐縮に存じ候へども，右研究室のしかるべき御方に御紹介の御名刺など賜らば幸甚に存じ候。そのうち参上いたしたく存じをり候へども，とりあへず書中御願申上候。〔後略〕[11]

新村は早速に紹介の名刺を与え，依頼の仕方について何かと助言をしている。この後，寿岳は京大研究室への出入りを許され，調査に通うようになる。寿岳日記に調査の動向を記す箇所は少ないが，例えば 1939 年 7 月 18 日条によれば，早朝に家を出て，用事を一つ済ませた後，京大へ行き「静子を待ち合わせて午前中阿波及び肥後の和紙文献をうつす」とある。また同月 26 日条にも「午前，静子と農学部にあり」とあり，京大での文献調査にも静子を伴い，一緒に作業をしている。

文献からの抄出記事を旧国ごとにまとめ，紙業調査資料もあわせて旧国名ファイルに整理したことについては，新村出からの示唆が関係するようである。実地調査の途上にあった 1938 年年末に，10 月に訪れた兵庫県有馬郡塩瀬村の名塩についてまとめた寿岳の論考（「名塩紀行」『和紙研究』第 1 号，1939 年 1 月 10 日刊）に接した新村は，次のように寿岳に書き送っている。

年もくれはてて目出度御迎年のことと存じ大慶の至り存候。けさ和紙研究第一号に接し愉快ニ存候。名塩紀行その他拝見いたし候。別ニいそぐ次第にてもなけれど，高輪の方へも一部御献上相成りては如何ニやと存申候。〔中略〕〇尚些事ながら，旧時代早くのことニつきては，一々旧き国名の方のみにてはなくとも，府県名下ニ必ず国名を並記する方（歴史的研究ニハ）適当かと存候。（摂津国…名塩，丹波国…の如くニ）早々。〔＿＿は筆者〕[13]

実地調査の成果をまとめた寿岳の論考については次項で検討するが，調査資料の整理だけでなく，寿岳が実地調査の成果を記述する際には，『旅日記』も同様であるが，府県名とあわせて旧国名を並記している。

3　調査成果の発表

(1) 宮家および帝国学士院への報告

漉場調査のため，3年間にわたり学術奨励金を授与した高松宮家へは，2年目の授与を受けるにあたり1938年7月13日に高輪邸を訪問し，同年4月までの和歌山・奈良，関東・東海方面，京都府下の丹波・丹後，東北地方への調査旅行を報告しており，高松宮からは「よくそんなに廻れたね」との言葉があったという[14)]。そして，3年目には報告のために『和紙景観』を制作する。

『和紙景観』（1939年7月造）は，この制作までに調査した70の漉場のうち25カ所を選び，折帖仕立の各丁に，漉場1カ所ごとに情景写真の焼付1枚と紙の実物見本1枚を貼付したもので，4冊つくったうちの1冊を宮家へ献上している。書名を付け題箋を書いたのは新村出，用紙の紺染指導は和紙研究会の同人仲間である上村六郎，紙の採集・写真撮影者はもちろん寿岳文章である。本文用紙は下野飛駒産，見返用紙は越中富山産，裏打用紙は出雲岩坂産，文字・番号を印刷貼付した用紙は紀伊古沢産，表紙は出雲大東油紙と奥付にあり，寿岳が吟味して取り揃えた手漉紙を用いた造本であった。

3年間の実地調査がすべて終了したのは1940年3月末であるが，学術奨励金を受けた成果発表として2年後の1942年5月12日には，上京して奨励金授与の推薦を得た帝国学士院の例会において「手漉和紙の歴史地理的研究」の題で30分間の講演を行っている。7名の研究発表がある中で最後の登壇であった[15)]。

講演内容は，同年11月刊の『帝国学士院紀事』第1巻第3号に「手漉和紙の歴史地理的研究序説」として掲載された。まず，古代以来の和紙研究資料を，昭和期に入ってからの近時に至るまで網羅的に掲げ，和紙の研究状況を概観する。そして，“カミ”の語源，杉原・引合などの紙名，溜漉（ためずき）と流漉（ながしずき）について考察する。講演時間や紙幅の関係から漉場調査の具体的様相には触れ得ず，まさに「序説」としての内容である。

そのなかで，特に流漉（紙料に粘料を混入して繊維を粘着させ，余分の水を簀桁から捨て流すことで様々な厚さに漉き分ける技術）について，末尾で次のように強調する。すでに米国人のハンターが溜漉に加え流漉の技術を発展させたのは日本のみであると著書で指摘していることを紹介した上で，さらに「繊維に程よきからまりを与へるに役立つのみで，いささかも自己を主張せずまた存在せしめないと云ふのが粘着剤の，殊に流漉の特色美点であり，わが和紙文化をつらぬ

く太い一線なのである」，中国や中国の初期製紙法を継承・発展させた西洋には溜漉のみで流漉はなく，「しかるにひとりわが国は，溜漉と共に流漉を持ち，わが国人の天性の器用さと相待つて」，どんな紙でも自由自在に漉きこなし，はやくも平安時代に優婉な和紙工芸文化を招来したとし，「敢てハンタァの提唱を俟つまでもなく，真に世界無比を誇り得る資格を有すると言ふべきであらう」と結んでいる。

寿岳は90年を超える生涯を通して和紙に深い情愛を持ち続け，世界の中で日本が最も美しい紙を漉くことを誇る[16]が，ここでの叙述には単にそれだけでない和紙文化の称揚があり，対米戦争中の帝国学士院における報告であることを意識したようすが見受けられる。なお，『帝国学士院紀事』は一般的な体裁の学術雑誌であるが，寿岳の論考の末尾には，吉野国樔村産の和紙に印刷した「和紙略年表」を，わざわざ折り込みで添えて製本されている。

(2)『和紙研究』『工藝』への発表と単著の刊行

寿岳は，漉場調査期間中から，すでに訪問した調査地について，比較的早く文章にまとめ，逐次発表していった。もともと寿岳は，大正末年の20代前半から英語雑誌や仏教系の会報などに短文を活発に投稿し，また自ら雑誌『ブレイクとホキットマン』の編集に携わり，私家版である向日庵本を手がけるようになっても，英文学・書誌学関係の雑誌や新聞の求めに応じ，多くの時評・書評・随筆等を発表する文筆家でもあった。1985年1月に発行された『壽岳文章書誌』（沖積舎）には前年7月までの著作文献2,912点をまとめるが，和紙関係の論考が多くなるのは漉場調査に出かけて以降のことで，この実地調査が，寿岳が本格的な和紙研究に取り組む契機となったことが見て取れる。

寿岳文章・静子『紙漉村旅日記』を出版する1943年9月までに，寿岳が漉場調査やそれにともなう文献調査の成果にもとづいて発表したおもな研究や著作は次のとおりである。

「紙漉外伝考」『工藝』第87号（1938年4月30日，日本民藝協会）
「漉場紀行」（和歌山・奈良）『工藝』第87号（同　上）
「名塩紀行」『和紙研究』第1号（1939年1月10日，和紙研究会）
「漉場紀行（二）」（関東方面）『工藝』第93号（1939年2月15日，日本民藝協会）
「紀伊産紙考」（上）・（中）・（下）
『和紙研究』第2・3・4号（1939年4月28日・8月10日・12月26日，和紙研究会）
「「源氏物語」に見えてゐる紙」『和紙研究』第4号（1939年12月26日，和紙研究会）
「「枕草子」に見えてゐる紙」『和紙研究』第5号（1940年4月10日，和紙研究会）
「下京の地紙漉」『和紙研究』第5号（同　上）
「「宇津保物語」に見えてゐる紙」『和紙研究』第6号（1940年7月10日，和紙研究会）

「杉原谷紀行」『和紙研究』第7号（1940年11月3日，和紙研究会）

「「栄花物語」「御堂関白記」に見えてゐる紙」

『和紙研究』第8号（1941年3月31日，和紙研究会）

「日向の紙」『和紙研究』第8号（1941年3月31日，和紙研究会）

「和紙の創制」『和紙研究』第9号（1941年9月15日，和紙研究会）

「和紙」『月刊民藝』第3巻第9号（1941年10月1日，日本民藝協会）

『和紙風土記』日本の美と教養3（1941年11月20日，河原書店）

Hand-made paper of Japan（『日本の手漉紙』）（1942年4月15日，国際観光局）

「両丹紙漉紀行抄」『和紙研究』第11号（1943年6月10日，和紙研究会）

このうち，『工藝』第87号は，この号全体が寿岳の紙漉調査特集になっており，寿岳による上記2本の論考に，挿絵として及川全三の色染和紙の実物貼附とその解説及び寿岳撮影の紙漉場写真を印刷したアート紙貼附の2種からなる。「紙漉外伝考」では，実地調査以前から寿岳が研究する和紙の西洋への伝播・紹介の過程とその評価について概観する。その末尾で，西洋において和紙への認識と評価が高まる明治初年を境に，日本では西洋の機械製紙を輸入し，さらに伝統的な手漉紙において必要以上に改良を図ることを，明治以降の和紙衰微とし，工芸史上省察すべき問題を孕むと指摘する。

「漉場紀行」は発表の約半年前に出かけた最初の2回の調査先である和歌山・奈良両県の紙漉場について詳述する。のちの『旅日記』の当該箇所と比べて，挿絵とした漉場写真の解説文の体裁をとるため，細かな表現や挿話の位置が違う部分もあるが，おおむね同様の内容・文章である。異なるのは冒頭に「小引」（短いはしがき）が付く点で，漉場調査の目的を「おもな仕事は現在手漉紙業の続けられゐる各地を歴訪して「今」の記録を取り，それを過去と結びつけるにある。横にひろがる地理的平面的研究と，縦を貫く歴史的立体的研究が交叉する点に所期の結果が見出されるからである」と端的に示す。そして，調査に同行した静子が日記を書き記録をとってまとめた旅日記から，「写真の説明かたがた，一行脚終るごとに発表していきたいと思ふ。」と抱負を述べている。

こうして『工藝』や『和紙研究』に発表されたのが，摂津の名塩，関東方面，山城・西ノ庄（下京の地紙漉），播磨・杉原谷，日向・本庄，丹波・丹後の各地である。それぞれ『旅日記』の箇所にはみられる村の情景や統計的な部分を省略して抄出されることが多いが，逆に日向・本庄などのように，『旅日記』では省略される資料「本庄塵紙ノ沿革大要」が収録される場合もある。

『和紙研究』に3回に分けて掲載された「紀伊産紙考」は，実地調査に歴史地理的考察を加えた論考にまとめられている。紀伊を熊野浦と高野山の二地域にとらえ，熊野では御札や参詣

客の歓楽のなかに紙の需要を見い出し，高野山では印刷事業と製紙との関わりを考察する。また有田郡の保田紙を和歌山藩との関係で検討し，日高郡の藤井紙や山路紙についても地元の知友からの情報を得て紹介する。最後に1936年に和歌山県統計課が作成した和紙・原料生産高の表を掲げ，1928年の「副業参考資料」の数字と比較検討している。「漉場紀行」の小引で述べた地理的平面的研究と歴史的立体的研究の交叉点としては，この「紀伊産紙考」が一つの試みであろう。

寿岳は，漉場調査の実施とその成果の発表に併行して，「私の国文学和紙行脚」として「源氏物語」など文学作品に登場する紙についても，次々と論考を発表する。また同時期に，『月刊民藝』・『阪急美術』・『中日文化』などの雑誌にも漉場調査に取材した随筆を発表しており，そのなかから数篇が寿岳2冊目の随筆集となる『紙障子』（1942年12月20日，靖文社）に収録されまとめられる。

Hand-made paper of Japan は，大東亜共栄圏建設の国策の一環として国際観光局からの依頼により，漉場調査から代表的な写真を選び，和紙について英語で簡潔にまとめられた冊子である。しかし力強く美しい和紙のすばらしさを伝えようとした寿岳の意図と違い，紙を漉く山村の貧しさを強調する内容とみた当局によって，この出版は制限されることになったという。これに反発した寿岳は，同じ内容をことさらに日本語の古い表現を多用して『日本の紙』（1944年2月，靖文社）を著し，後に刊行することになる。

『和紙風土記』は漉場実地調査のほぼ全容をはじめて発表した著作として重要である。京都の河原書店が企画・出版した“日本の美と教養”叢書の3冊目にあたるこの単著は，新村出を通して話があり寿岳が執筆することになったようである[17]。「和紙事始」，「和紙と時代」，「昭和の和紙」の3篇からなり，「和紙事始」は2カ月前に発行された『和紙研究』第9号掲載の「和紙の創制」の再録であり，西洋と東洋の紙の起源を考察し，日本における起源について記紀の記述などから紙の存在を考察する。他の2篇は書き下ろしで，「和紙と時代」は日本における紙の歴史を，古代から明治時代前期まで概観するまとまった叙述である。特にこの部分に関してと思われるが，小野晃嗣「中世に於ける製紙業と紙商業」（『歴史地理』第67巻第4号，1936年4月，日本歴史地理学会）の学恩を得たことを，「序」で特別に掲げている。

「昭和の和紙」が，漉場調査の全容を記述したものである。『旅日記』とは異なり旅程の順ではなく，北の陸奥に始まり順々と九州・薩摩の南端に至り，旧国名を掲げておもな漉場について述べている。はぶかれる漉場もあるが，地方の風土や府県内の抄紙事情，村況や人びとの暮らしぶり，紙漉きの概況，宿泊先の環境や出される食事まで，『旅日記』にみられる要素は盛り込まれている。調査事項を網羅的に記す部分や統計的な数字が並ぶことがないため，かえって『旅日記』より読みやすく，当時における紙漉場の全国的動向をとらえやすい面がある。

また各地の記述に入る前に，いわゆる“改良漉”について，寿岳が考える問題点を詳述する。

『旅日記』では全体が紀行文の体裁をとるため，記述のなかに散見されるのみで，あらかじめ知識がないと事情がわかりづらいが，ここではわかりやすく明記される。要約すると，紙漉きの工程を説明した後で，紙漉きにはおびただしい労苦と時間を要するが，それをできるだけ簡単に短時間で労苦をかけずに，しかも多量の数を作ろうとするのがいわゆる改良漉，とする。紙料を作るための煮熟に苛性ソーダを，漂白にカルキを，叩解にビータを，天日干しの代わりに熱気乾燥を利用し，旧来の一枚漉に対して，六枚漉，八枚漉，甚だしくは十二枚漉などの大型の簀を使う。改良に比例して上がるのは能率だけで，紙そのものは不思議にも稚拙な古法ほど美しい，と主張する。「骨身を咨んで甘い汁を吸はうと云ふやうな横着な考が，そもそも工芸には敵である。正直と忍耐と親切とから離れたとき，用に奉仕する工芸の面子がどこに成り立たう」と続ける。寿岳の紙のとらえ方に，民芸同人としての視点が明確である。続けて，改良漉は家内工業から資本主義工業へ移る過渡的な形態を産む契機であり，一家総がかりの副業は行われず，近在の女子を安い労賃で雇い，企業者は仕事をせず洋服を着て利潤の計算ばかりを行う小資本家となる場合が多い，と断じ，「工芸は経済や道徳と切り離して考へられず，物の美は同時に心の美でもある」と，このくだりを結んでいる。

(3) 京都向日版『紙漉村旅日記』の制作

1941年11月刊の『和紙風土記』は，『旅日記』の2年近く前の刊行であるが，この印税が『旅日記』出版のために使われたようである。寿岳は1941年2月1日の日記に次のように記す。

> 河原書店で「和紙風土記」の印税を先貸ししてくれないだらうかと西堀君に相談したら，早速￥150の小切手を届けてくれた。これで「和紙行脚」の用紙入手の足しにする。[18]

「西堀君」とは“日本の美と教養”叢書の企画者の一人であり，寿岳に執筆を依頼した西堀一三という人物で，「和紙行脚」とは『旅日記』のことを指している。この頃すでに向日庵本としての『旅日記』出版の計画があり，印刷のための和紙を調達する資金として，印税が前借りされた。この後，翌月にあたる3月から8月にかけて「和紙風土記」の原稿を書き継いでは，河原書店に持って行く様子が日記に登場する[19]。

『旅日記』出版の計画は，『和紙風土記』の話の前から進められていたようで，印税の前借りを頼んだ7日後の2月8日の日記に「浅田へ行って「紙漉行脚」の装幀をたのむ。都合よく出来るらし」[20]とある。『和紙景観』の経師として名前の出る浅田喜八郎かと思われるが，『旅日記』には名前が挙がらず詳細は不明である。同年3月29日には「西邨君をとひ，紙の保管をたのむ」とある。これについては『旅日記』「まへがき」で「本文用紙を永い間保管していただいた京都市の西邨辰三郎氏」と感謝が捧げられている。5月13日には「龍大をすませて農

学部へしらべにゆく」，6 月 17 日には「午前龍大，午后帝大農学部にあり」と文献調査が継続している。8 月 11 日には「便利堂へより，紙の焼付をたのみ」とあり，「まへがき」に「凡て私の持ちだす条件通りにコロタイプ印刷を完了された便利堂の藪田嘉一郎氏その他の諸氏」とあるように，『旅日記』本文中に挿入・貼付される写真として和紙へのコロタイプ印刷を頼んでいる。すでに造本の細かな計画がある程度固まっており，具体的に話が進行しつつある。

その後の詳細は今のところよくわからないが，翌 1942 年の日記の 8 月 15，16 日には「「紙漉村旅日記」の稿をつゞく」とあり，「和紙行脚」から書名が改まっている。11 月 5，6 日にも原稿を書き継いでいる。

1943 年になると，『旅日記』の原稿を執筆することが日記に頻出する。1 月 2 日から「「紙漉村旅日記」ひるのま」と作業を進め，13 日には「「紙漉村旅日記」信州に入る」，20 日には「甲州終る」とあり，1939 年 5 月に 12 回目の旅行で訪れた甲信地方の原稿をこの間に書き終える。1 月 31 日には 14 回目の調査旅行である「九州に入る」とあり，その後も終日在宅できる休日ごとにまとまって書いており，3 月 4 日には「午前九時すぎから用達に京都へ出，午后三時かへる。それから紙漉村旅日記を書き，午前〔午後のことか，筆者注〕九時擱筆。五百字詰で 426 枚となる。さすがに疲れた。」と本編部分を書き終えている。7 日，9 日に原稿の確認作業をし，13 日には「内外へより「紙漉村旅日記」の原稿を渡す」とある。この後，印刷を担う内外出版印刷株式会社で文字の組版をし，校正刷りが出されたようで，5 月 30 日には「終日校正」，翌 31 日には「「紙漉村旅日記」はすっかり校了になつた」とあり，その翌日の 6 月 1 日には「内外へ寄り校正刷をわたす」とある。また附録として末尾に付けた埼玉県小川町への 1935 年調査行の日記抄，下京の地紙漉，杉原谷紀行の原稿作成をしたり，その後も 2 校以降の校正作業が続いている。

原稿の執筆や校正と併行して，本の制作者としての仕事も精力的に進める。当時寿岳は，京都では龍谷大学と，京都一中の同窓会が経営していた補習教育機関で寺町二条にあった時習学会で授業を受け持っていた。出講のため京都へ出かける行き帰りに，本づくりのために諸方へ立ち寄り，頼みごとや打合せをしている。上村六郎には絹糸や紙布を染めてもらい（1 月 18･25 日，5 月 9 日，7 月 21 日），表紙に使うため紙布の湯のしを頼む（7 月 24 日）。便利堂ではコロタイプ印刷の打合せをする（6 月 21 日）。8 月に入ると校正が最終段階に入り，8 月 6 日には「製本見本ができてゐた」，25 日には「内外出版へ本刷りにゆきしに，まだ準備できてゐず」，27 日にも「便利堂へ紙を届け〔中略〕かへりに内外と中野印房へ寄る」とある。2 日後の 29 日には長女章子の東北帝大入試に付き添って東上するが，その車中でも勉強する章子の横で「余は「旅日記」の手入れ」をして誤植を発見，内外の担当者である藤谷多喜雄へ報せた。9 月 27 日には「折帖」に取り掛かっていることを確認し，10 月 18 日には「内外出版へ行つたが藤谷をらず，真柄へ行き「紙漉村旅日記」の製本を督促す」と真柄製本所へ自ら督促に出向く。そし

て11月2日には「漸くにして紙漉村旅日記の製本が出来かゝつてゐるらし。題箋を印刷する紙を失へたと言ふ，困ったことである」，19日には午前中三宮駅で神戸市主催の学徒壮行会に出席した後，すぐに京都へ向かい「真柄にて十冊の製本を貰はんとせしも，まだできてゐず，かへりが遅くなる」と日記に記す。『旅日記』の刊記には「昭和十八年九月造」とあるが，9月は製本前の段階まで終えた頃で，11月中に徐々に製本が進められたようである。

寿岳文章日記の記述にみえる『旅日記』の制作過程は上記のとおりである。出来上がった『旅日記』は，表紙に奥州白石郷土工藝研究所で織成され上村六郎が染めた紙布が用いられ，本文用紙として2種選ばれた富山・本高熊と佐賀・仁比山村の三谷傘紙に印刷され，別に奥州白石産の和紙に6cm四方大でコロタイプ印刷された写真を挿図として1冊につき199点貼り込んで作られている。この書物を作るため，自らが選び調達した表紙・本文用紙・写真用紙を加工・印刷する工房・会社へ持ち込み，複雑で手間のかかる作業を依頼し，工程確認に何度も足を運ぶ。書物制作の統括者としての姿を，日記を通して知ることができる。

『旅日記』には，紙業調査のなかで収集した紙のなかから134種が選ばれ，うち2種は紙の量に余裕があったか1頁大に近い大きさで挟み込まれるが，他は写真の6cm四方に近い大きさに切り分けられた紙片が，組版であらかじめ設けられた空白部分に上端で糊付けされる。この貼付作業を印刷・製本工程のどの段階で行ったか，技術に暗い筆者には今のところわからない。ただ寿岳日記の1943年12月8日には「柳さんへ今夜都ホテルへ行きかねる由電話す。夜，紙を切る」，翌9日にも「晴，学院〔関西学院，筆者注〕にあり。帰るや直ちに紙きり」とある。このあと日記は年末まで白紙となり，翌1944年の日記は今のところ存在が確認されていない。万一この記事が『旅日記』に実物貼付するため収集した和紙を切り分ける作業であれば，寿岳も手仕事で造本に参加していたことになる。

紙漉く人ならぬ寿岳は，紙の抄造に関しては自らの理想を主張するのみであるが，造本においては制作者となる。向日庵本の『紙漉村旅日記』は，漉場を静子と2人で歩いて調査するところからはじまり，原稿の執筆から装幀の企画や制作まで，寿岳が本づくりのすべてに携わって完成させた書物である。出来上がった『旅日記』は簡素な美しさが追求され，寿岳が理想とする混ざりもののない正直な材料で古法を守って漉かれた紙に，相通じるものがあるように思われる。

図4　『紙漉村旅日記』　本文部分

おわりに

以上、1937年秋から1940年春にかけて日本各地の紙漉場をまわった寿岳夫妻による調査の旅と，旅行後に取り組まれた文献調査，それらの成果をもとに発表された著作，集大成としてまとめられた『紙漉村旅日記』についてみてきた。最後に，寿岳による手漉紙業調査の意義について考えてみたい。

まず，京都向日版『紙漉村旅日記』は，寿岳夫妻が手がけるいわゆる向日庵本のなかの一本として，内容・造本ともに充実した書物工芸の最高峰といわれる評価を得ている。ともすれば造本の評価や夫妻での紀行文という体裁に注目が集まるが，寿岳が「まへがき」で自負し，また今日においても紙の分野では自明のことであるが[21]，1930年代の手漉紙業を記録した内容に重要な価値がある。古代から続く伝統的な抄紙の技術が，衰退期にあったとはいえまだ生業として全国各地に存続していた1930年代の手漉紙業を記録化した希有の成果であり，網羅的な調査地の数をこなし学術的な手法をふまえて記録されていることで，科学的な内容を持っている点を，あらためて確認しておきたい。この漉場調査を契機として，寿岳は本格的に紙の研究に取り組み，かつ紙漉場と紙に関心を寄せる人びとをつなぐ存在となった。

また『紙漉村旅日記』に代表される数多くの紙に関する著作のほかに，紙業調査に関連して集められた数多くの紙に関する文献記録，ちらし・広告の類に至るまで，旧国名ごとに整理され残されていることが重要である。そのなかには，京大研究室で地誌類から書写した紙に関する記事の写しや，生産地から送られた手書きの資料なども含まれ，寿岳の著作のなかで紹介されていない紙関連資料も，これらの中に多く含まれていると推測される。さらに貴重なのは，旅の途中で奔走し，市場に流通する多くの紙の実物を見本として持ち帰っていることである。これらの一部は四角く切り取られ，実物貼附という民芸同人が用いる実証的な方法[22]により，1冊あたり134枚を手貼りして限定150部を造本するという献身的な手仕事により『旅日記』のなかで，調査報告として結実している。造本に使われたもの以外の紙見本について，寿岳がどのように考えていたか詳しくは知れない。しかし，全国各地にわたる生産地の詳細な記録とともに収集されたこれらの紙，しかも漉かれたままの素紙は，今後の調査研究を可能にしており，他にみることのできない大きな資料的価値を内包している。『旅日記』の背景として，これら関連資料が今日まで豊富に残されていることも，また重要である。

一方で，『旅日記』の内容やこれら紙関係資料を詳細に検討することは，寿岳が批判するいわゆる改良漉が，1930年代後半の日本において，いかに山間僻地の農村まで浸透していたかを証明することにもなるだろう。幕末から明治にかけて，土佐藩御用紙漉きの家に生まれた吉井源太（1826-1908）は簀の大型化により生産性を向上させ，新たな機能を持つ薄葉紙などを開発し，手漉紙の近代化を図り，日本各地へ巡回指導した[23]。その後，1909年にはじまる政府

主導の地方改良運動のなかで，製紙業が盛んな高知や岐阜の試験場技手が全国の農村に派遣され，改良漉を広めていった。化学材料を使いできるだけ大量生産しようとする当時流行の製紙工程と，出来上がる紙の劣化を，寿岳は『旅日記』のなかで繰り返し批判しているが，実地調査にあたっては，よいもの美しいものだけでなく，ありのままの状況を実態に即してあまねく記録し収集する態度を貫いた。結果的に近代和紙の技術変遷を，記述と実物によって跡づけることにもなっていると思われる。

『旅日記』のなかで，寿岳が厳しい批判を加える記述が目立つのは，吉井源太を生んだ高知を含む四国の旅である。高知では，調査資金を下賜した高松宮家に別当として仕える旧藩主山内家の親族から寿岳夫妻の調査行が予告されていた関係で，現地で殊に歓待され厚遇を受ける。旧藩時代の史料調査には余念がないが，紙漉場では調査項目に従い淡々と記録し，実際に漉かれる紙にはほとんど言及しない。愛媛では，訪ねる漉場では化学材料が多く使用されており，合理化が進む製紙工場や工場主の生活ぶりに至るまで否定的な見解を記す。

寿岳の紙業調査資料のなかにある「全国手漉昭和十五年度府県別生産高」は，寿岳が四国を旅した 1 年後の状況を示す数値である（図 5）。このなかでもっとも高い数値を示すのが四国の高知，愛媛であることは，『旅日記』の記述と考え合わせると示唆的である。2 県は，21 世紀の今日なお，手漉紙を含む製紙業の日本有数の産地として継続している。

寿岳文章は，全国的な紙業調査によって，日本の紙研究の第一人者となったといえるであろう。そして，混ざりけのない材料を用い，昔からの手仕事により誰でもが漉くことのできる紙

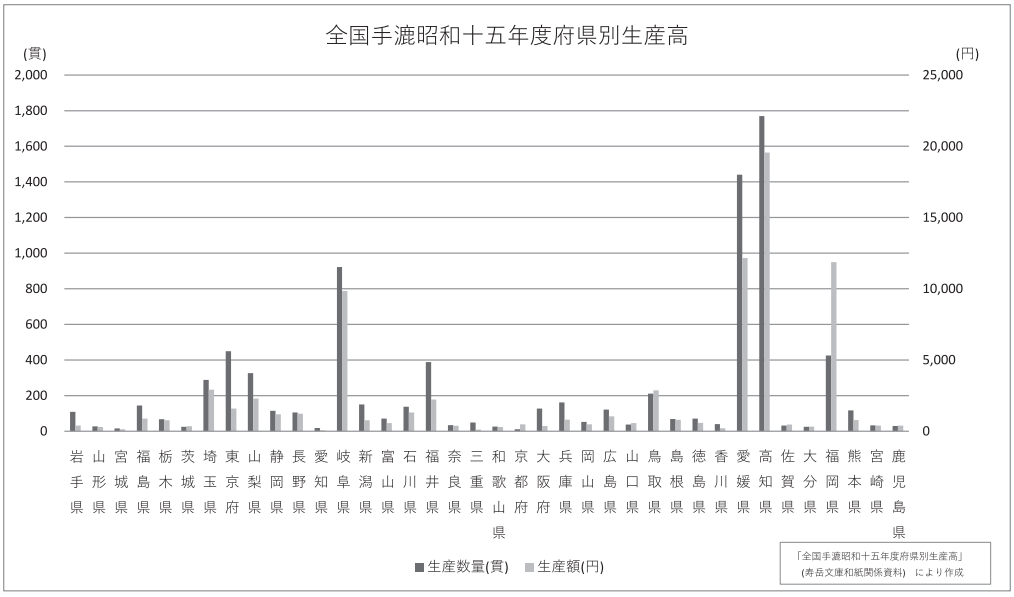

図 5　全国手漉昭和 15 年度府県別生産高

が力強く美しいとして，生涯にわたってそうした紙をつくる現地を励まし支えようとした。戦時下における『旅日記』制作の意義について，戦争終了後に寿岳が理想とする伝統的な抄紙復活のため現状を忠実に記録することを「まへがき」で掲げる。そして『旅日記』を寿岳理想の造本を追求した作品として完成させる。しかし現実には，戦後も寿岳が理想とする紙漉きは復活せず，和紙の抄造自体も衰退していく。寿岳が工芸の視点でとらえる紙と，産業として成り立つ製紙との差は，当然ながら大きい。

寿岳の1930年代の和紙漉場調査と研究に関しては，自ら取り組む書物の制作との関係や，戦時下という時代のなかでの和紙文化の強調，中国・東南アジアの紙への関心の寄せ方など，まだ検討すべき点が多いが，後考を期したい。

注

1）寿岳文章日記は，向日庵資料として向日市文化資料館で保管中である。2021年1～3月に向日市文化資料館で開催した「寿岳文章 人と仕事 展」のために，同展実行委員会によって居宅である向日庵内の調査が行われ，一部の資料を同館に移動し展示・保管するようになった。向日庵資料とは，後掲注5に記すように，現在，兵庫県多可町所蔵となっている寿岳の和紙研究関係資料と区別するため，多可町へ寄贈せずに京都府向日市所在の居宅・向日庵内で保管されてきた資料について，便宜的に用いている資料群名である。

2）寿岳文章宛新村出書簡（新村出記念財団所蔵）　新村と寿岳の間に交わされた書簡の大部分は，同財団のホームページで写真が公開されている。

3）寿岳文章日記1937年3月31日条，4月21･24日条。及び，同年4月21日付　新村出宛寿岳文章書簡（新村出記念財団所蔵）

4）有栖川宮奨学資金申請書類写（新村出記念財団所蔵）

5）旧加美町内の杉原谷は，中世武士階級が用い後世に楮紙の一種として一般名称化する「杉原紙」の発祥の地であることを，1940年に新村と寿岳が現地踏査を経て実証した地であり（『和紙研究』第7号（1940年11月3日発行）所収論文），1960～70年代に途絶えていた和紙抄造を復活させる動きが地元でおこり杉原紙研究所が設立される際に寿岳が協力をしている。その縁で寿岳の和紙研究関係資料一式が町へ寄贈された。2000年に，和紙博物館・寿岳文庫が建設され，展示・保管されている。

6）紙業調査時の寿岳は，関西学院大学法文学部では講師，関西学院専門部の教授であり，「関西学院大学教授」ではない。井上琢智氏のご教示による。厳密には，前掲の調査先への依頼書式にある「関西学院教授」の方が肩書きとしては正しい。また『帝国学士院紀事』第1巻第3号（1942年11月30日発行）掲載の「手漉和紙の歴史地理的研究序説」では，筆者として「関西学院専門部教授」と，より正確な肩書きを用いている。

7）宇賀田達雄「水谷良一氏の業績」『民藝』第588号（2001年12月発行）

8）1938年10月3日付　寿岳文章宛水谷良一書簡（向日庵資料）

9）寿岳の紙関係資料を一括して寄贈された兵庫県多可町では，『旅日記』貼付の実物見本について図録『寿岳文章の集めた和紙』（2016年）を発行し，収集された素紙についても整理を進め，2016年6月の全国手漉和紙青年の集い杉原紙大会において「寿岳文章全国和紙展」として322点が目録とともに公開された。また2021年1～3月の向日市文化資料館特別展「寿岳文章 人

と仕事展」でも，多可町山仲進氏監修により 143 点が展示された。現在も引き続き素紙 1 枚ごとの詳細な目録作りと研究が進められている。

10） 山仲進氏のご教示による。

11） 1938 年 9 月 11 日付　新村出宛寿岳文章書簡（新村出記念財団所蔵）

12） 1938 年 9 月 18 日付　寿岳文章宛新村出書簡（新村出記念財団所蔵）

13） 1938 年 12 月 31 日付　寿岳文章宛新村出書簡（新村出記念財団所蔵）

14） 寿岳文章日記 1938 年 7 月 13 日条

15） 1943 年 5 月 7 日・11 日付 寿岳文章宛新村出書簡（新村出記念財団所蔵）

16） 一例として，「和紙とわたくし」『別冊太陽創刊十周年記念号 和紙』（1982 年 10 月）

17） 1940 年 12 月 24 日付，1941 年 2 月 1 日付，同年 8 月 28 日付　寿岳文章宛新村出書簡（新村出記念財団所蔵）

18） 寿岳文章日記　1941 年 2 月 1 日条

19） 寿岳文章日記　3 月 25 日条，6 月 1・20 日条，7 月 16・17・25 日条，8 月 7・15・16 日条

20） 寿岳文章日記　2 月 8 日条。以下，本文中の日記からの引用はすべて寿岳文章日記の同日条からである。

21） 兵庫県多可町『寿岳文章の集めた和紙』（2016 年），及び国際シンポジウム「20 世紀の和紙 寿岳文章 人と仕事」（2021 年 10 月 16 日）講演資料のなかの山仲進「寿岳文章収集和紙の資料的価値」

22） 高木博志「一九四〇年代の寿岳文章」『近代京都と文化』（思文閣出版，2023 年）

23） 奈良国立博物館（展示図録）『和紙―近代和紙の誕生』（2016 年）

要　旨

寿岳文章（1900-92）は，関西学院高等学部や京都帝国大学文学部選科で学び，英国詩人ウィリアム・ブレイクの研究やダンテ『神曲』の研究で知られる英文学者，書誌学者である。妻の静子も文筆家であり，夫妻は 1933 年に京都郊外の西向日町住宅地に居宅向日庵を新築し，そこへ転居する前後から夫妻協力して私版の書物の制作をはじめる。

やがて向日庵を拠点としてはじめたのが，北海道を除く本州，四国，九州の和紙漉場調査であった。紙業調査は，寿岳がかねてより師事する言語学者新村出の勧めによるもので，帝国学士院の推薦により，有栖川宮記念学術奨励金を得て実現した。1937 年 10 月から 1940 年 3 月までの間に，15 回の旅行で 96 ヵ町村の漉場を実地に訪れている。調査計画の作成と実施には，民藝同人として親交のあった内閣統計局労働課長水谷良一の協力を得た。

調査旅行の多くに妻静子が同行し，旅先の風景や紙漉村の描写は静子が，紙漉きに関する専門的な記述は文章が担当し，日々の調査記録が作成された。調査地では文章自ら写真をとり，紙を収集し持ち帰った。紙漉きの沿革や統計資料も集め，実地調査と併行して行われた文献調査の成果と合わせて，紙業調査資料としてまとめてファイルに整理された。

漉場調査の成果については，寿岳は調査期間中からの早い段階から，既調査地について『工藝』や『和紙研究』などに論考を発表している。調査の集大成が，私版の向日庵本として制作した文章・静子共著『紙漉村旅日記』である。造本で評価が高いが，訪れた多くの紙漉場ごとに整理された調査項目に従い記述され，紙業調査資料に基づく統計なども含めた科学的な内容を持つ。

寿岳はその著作で，化学材料を使い効率化を図る当時流行の改良漉を繰り返し批判する。紙を工藝の視点からみる寿岳は，まざりけない材料で古法を守り漉かれる紙を評価するが，産業としての製紙業とは開きがある。

キーワード：寿岳文章，向日庵本，『紙漉村旅日記』，和紙，改良漉

Abstract

Bunsho Jugaku (1900-92) is an English scholar and bibliographer known for his research on William Blake and Dante's Divine Comedy. His wife Shizuko is also a writer. Based in their home, Koujitsu-an, the couple conducted a survey of washi mills in Honshu, Shikoku, and Kyushu. This research was realized with an academic scholarship at the recommendation of Izuru Shinmura, whom under Jugaku studied.

From October 1937 to March 1940, Jugaku visited 96 towns and villages on 15 trips. Ryoichi Mizutani, Director of the Labor Division of the Cabinet Statistics Bureau, who was a fellow of Mingei, cooperated with the survey plan.

In the survey, Shizuko recorded the scenery of her travels, and Jugaku recorded the professional papermaking process. Jugaku took pictures, collected papers, and brought them home.

The culmination of their research is "Papermaking Village Travel Diary" by Jugaku Bunsho and Shizuko. It is highly regarded for its excellent binding. It has scientifically researched and described contents about papermaking at that time.

Jugaku strongly criticizes the use of chemical materials to make paper more efficient. Jugaku, who sees paper as a craft, appreciates paper made by old methods using materials that cannot be mixed, but there is a gap between paper manufacturing as an industry and as a craft.

Keywords：Bunsho Jugaku , Kojitsuan book, "Paper making village travel diary", washi, improved paper